

# 「プレデターの帝国」化する米国が招く不安 トランプ政権が原則崩す

有料記事 朝日新聞編集委員・塩倉裕 2025年3月25日 6時00分

藤原帰一・順天堂大学特任教授

「プレデターの帝国」化する米国が招く不安 トランプ政権… > 写真・図版



ロシアによるウクライナ全面侵攻に停戦をもたらそうとしているトランプ米大統領。平和を追求しているとされるその動きに、不安や反発の声があがるのはなぜでしょう。国際政治学者の藤原帰一さんは、**米国が「プレデター（捕食者）の帝国」になりつつある**と警鐘を鳴らします。どうということでしょう。

## プーチン氏の考えへの追従が招く不安

——「和平」を目指しているはずのトランプ米大統領の動きが、世界中の少なくとも人々に不安や反発を抱かせています。

「当然です。トランプ氏が今進めているのは和平ではなく、**プーチン氏の考え方への全面的な追従**です」

——追従ですか。

「少数意見で驚かれるでしょうが、それ以外に評価のしようがありません。交渉に臨んでいるトランプ氏の判断のうち、**現状でカギになるのは次の二つ**だろうと私は見ており、それらはいずれもプーチン氏の判断と同じだからです」

「①**ロシアが武力でウクライナから奪った支配地域をロシアの主権下にあるものと認める**②**ウクライナ住民への大規模虐殺や人権侵害に関心を持たない**——です。どちらも国際政治の原則を踏みにじる判断です」

——国際政治の原則とは何を指すのでしょうか。

「**戦争に関する国際政治の最低限の原則**は『主権国家の独立は保全される』、つまり、**侵略戦争の禁止**です。加えて**ジュネーブ 4 条約（1949 年）**が、たとえ戦争中でも民間人や民間施設への攻撃は禁じるとの原則を定めています」

「それは悲惨な第 1 次世界大戦と第 2 次世界大戦の体験を経て人類がようやく手に入れた原則であり、いろいろと**限界はありながらも制度化**していました」

——トランプ氏の二つの判断は、彼の持つどのような国際秩序観を映し出しているものでしょうか。

## 大国が支配する時代への逆戻り

「**大国が小国を力で支配するのは国際関係ではむしろ当然だとする考え方**でしょう。そう考えるから、**米国がウクライナを支援する意味は理解できない**という話になる。和平交渉でウクライナを重視しないのも、**ロシアと対等な主権国家ではなく従属すべき小国だとの考えの表れ**でしょう」

——今を歴史的に見たとき、国際秩序のあり方にどのような変化が起きていると捉えるべきでしょうか。

「現代世界は『大国が小国を支配する国際政治』ではない国際政治を、何とか実現できていたはずでした。しかし今、その**中心の一つだった米国が世界を第 2 次世界大戦以前の**

状態に戻そうとしています。大国による植民地獲得競争が戦争を繰り返し引き起こしていた時代への逆戻りです」

「現代の米国は『デモクラシーの帝国』だと、私はこれまで語ってきました。けれど米国は今、『プレデター（捕食者）の帝国』へと急速に変わりつつあります。和平を掲げているが、トランプ氏の言動が人々に不安をもたらしている理由も、そのためです」

——米国の「プレデター」化は、いつ、どのように進んだのでしょうか。

## 最強の力を持つプレデターという危険

「トランプ大統領が再任される以前、ここ 15 年間ほどの米国は、むしろ、ロシアと中国のプレデター化を食い止めようとしていました。ロシアがクリミアを併合したり、中国が島嶼（とうしょ）部への支配を広げたりする動きを抑止しようとしたのです。その試みはバイデン前政権まで続きましたが、結局は失敗しました」

「そしてトランプ氏のもとで今、米国は自分自身がプレデターになる道を進み始めています。ロシアと中国と米国がそれぞれ捕食者として小国を蹂躪する世界が現れつつあるのです。トランプ氏の話は荒唐無稽に見えますが、グリーンランドを獲得する話もカナダを併合する話も、本気で受け止めたほうがいい。米国の持つ世界最強の力を使えばロシアや中国以上の捕食ができるはずだと考えているかもしれません」

——アジアにはどう影響が表れてくるでしょう。

「ロシアがウクライナを支配するのを当然視するのと同様に、中国が台湾を支配するのを当然視する可能性はあるでしょう。トランプ氏は中国への対抗を打ち出していますが、関心対象は経済の領域であって軍事の領域ではありません」

——大戦の反省から侵略をなくす方向へ進んだ世界で、米国は大きな役割を担いました。そもそも「デモクラシーの帝国」の特徴とは何だったのでしょうか。

「領土としての植民地を支配・拡大するのではない方法で世界的影響力を広げたことです。具体的には軍事基地を他国に置いたり同盟関係をネットワーク化したりすることを通

じて、米国の言うことを聞く国家を世界各地に広げました。その際、**国境を超える普遍的価値として資本主義とともに掲げたのが民主主義、つまりデモクラシーでした**」

「この先、『**国際社会では力による支配が昔からずっと現実だったのであり、米国もロシアも中国も何ら変質していないのだ**』との声が出てくるでしょう。間違いです。**大国が単独で小国を併合しようとするなどという事態は、そうそう起きることではなかったのです**」

——帝国であるかのように他国を従わせる米国の振る舞いがなぜ、一定の国際的支持を得たのでしょうか。

「**大国であっても武力で小国をのみ込むことはしないという原則は、他国にとって受け入れやすいものだったから**です。ウクライナを支援するかどうかは、**国際政治の原則を変えるかどうかの問題**でもあります」

## 藤原帰一さん

1956年生まれ。順天堂大学特任教授。東京大学名誉教授。戦争と平和に関する考察で知られる。著書に「平和のリアリズム」など。「世界の炎上 戦争・独裁・帝国」が近日刊行予定。